

20世紀の神戸の建築

武 田 則 明

キー・ワード：神戸の建築の過去、現代、未来

はじめに

神戸市立博物館に行くと旧居留地の2つの模型がある。1つは1900年までの居留地時代の模型である。居留地は欧米列強国による議会議権、警察権、裁判権等が独自に行われ、日本の政府の権限が届かない治外法権の地区である。ちなみに清国は列強国とは認められず、居留地に接して南京街や横浜の場合は居留地である関内に接して中華街が構成された。それは列強国の人々の生活を維持する為に食事や散髪やテーラーを連れて来たからである。居留地時代の建物は各国がそれぞれの国の様式で建てられていた。日本が列強国の一員に成った時にいつまでも治外法権ではおかしいので、1900年に治外法権が無くなり、その時から居留地に旧の字が付いた。ちなみに中国の居留地、向こうでは租界と呼ばれていたが、租界が無くなったのは太平洋戦争が終結した1945年である。もう1つの模型は1993年にアーバンリゾートフェアとアーキテクチャーフェアが開かれた時に1945年以前の旧居留地の模型が作られた。私はアーキテクチャーフェアのお手伝いをした関係で、現在の旧居留地の模型も作ろうと提案したが、予算の関係でそれは出来なかった。阪神大震災の後、旧居留地も多く建物が被災して、街はすっかりと変わってしまった。その模型をつくっておけば良かったのにと悔やまれるところである。この3つの模型と震災後に建てられた街が、まさに神戸の近代建築を語るキーワードと成るからである。最初の1つは19世紀の建築群であるが、その模型と現在の町並みがまさに20世紀の神戸の建築を居留地の26ヘクタールの狭い地域に残されている、常に公開された、建築博物館の役割を果たしていることに成るからである。

20世紀建築の分類

20世紀は大きく1945年の太平洋戦争が終結した時を持って2つに分けられる。日本は明治元年から、在来の日本様式を捨てて欧米化に向けて邁進する。全ての公的な建物を洋風建築で作っていった。一般国民にとって新しい政府がどのように変わろうとも生活は変わらない。権力者が入れ代わるだけである。権力者同士即ち江戸幕府と薩長の戦争も一般国民は見学してただけで、直接戦争には加わらなかったからである。しかし役所をはじめ公会堂、裁判所、学校建

築が次々に洋風建築で作られていくと、田舎においても洋風の小学校ができると、時代が変わったことが分かる。日本の為政者達は欧米の技術力に驚いた。特に兵器である鉄砲や大砲の弾丸の飛ぶ距離や、着弾の正確さには舌を巻いた。昨年舞子に砲台跡が発見された。これは江戸幕府が明石藩に命じて作らせたもので、淡路島の砲台と共に海峡を挟んで外国船が来ても通れないようにすることが目的である。しかし長州事件で判明したように砲台からの飛弾距離の外からの砲艦射撃でひとたまりもなく壊滅したことが証明されている。このような技術格差は造船技術や、それらを支える製鉄技術等の産業技術の格差に目覚めた。欧米列強国の植民地政策から、日本を守ろうとすれば大急ぎで欧米の技術やそれを支える学問を学ぶ必要を感じた。この意味から明治の初めはお雇い外国人を招聘して学び、次いで日本人が欧米に留学してそれらの技術力を学んでいった。

日本人の改良主義

日本人は優秀な民族である。細かい技術やその改良が得意である。種子島に火縄銃が付いた後に織田信長によって鉄砲の一斉射撃により、無敵を誇った武田勝頼の騎馬軍団を破ったことでも証明される。この一斉射撃はナポレオンよりも早かったことは事実で、世界初であった。この事はたった2挺の種子島銃が短時間の内に何千挺の種子島銃を生産できる技術と工業力が在った事を示している。日本の多くの文化や技術は独自に開発されたものよりも、例えば社寺建築の場合を見ても、日本には伊勢神宮のような掘立て柱の建築技術しか無かったが、これでは建物は長もちしない。伊勢神宮が20年ごとの遷宮を行う理由もそこに在る。奈良時代以前の首都は短い期間に遷都を繰り返していたのは、制度上と言うよりも、建物が耐えなかったからであろう。仏教伝来以後中国から新しい技術が伝わって来た。それは礎石の上に柱を建てる事であり、柿葺や草葺の屋根では寿命が短かったが、瓦葺が導入されると、寿命がのびる。又柱梁の木部は水にかけると寿命が短い、光明丹や青丹等の塗料を塗るとこれも木の寿命が伸びた。このように建築の耐用年数が飛躍的に伸びた結果、奈良時代に遷都が止まってしまった。この後亀山から平安京に移って、明治時代まで首都は止まってしまった。このように外国から学んだ技術であるが、その技術を改良して和様等の独自の建築様式を作った。そして世界1の木造建築国へと発展させた。このような特性を持った日本は明治時代も同じく世界有数の技術国へと発展していき、日清戦争や日露戦争の戦勝国となり、列強国の一員にまで短い時間でなっていた。第1次世界大戦では日本も列強国の一員として出兵した。

日本の独自性を求めて

欧米列強国は一括りには出来ない。それぞれの異なった個性を持った国々である。米国、英国、仏国、独国、蘭国、伊国、等それぞれの強い個性を持った国々である。このように考えると、列強国の一員にまでなった日本が何時までも欧米の真似だけではよいのだろうか、日本の

固有性をもっと打ち出すべきではないかと考えるようになったこともうなずける。この考え方が欧米の真似をしていたのを第1期とすれば第2期に当たる。この時期は大正末から昭和の初めに起こり、1988年に壊されてしまった昭和4年に古宇田実設計の神戸商工会議所の建物がその先駆けとなった。この建物は一見すると近代的な建築に見えるが、細部を見ると、火頭窓や法隆寺の卍崩しの欄間や、鶴林寺の二つ斗式の斗拱、唐獅子、鯨等の日本古来のディテイルが数多く仕込まれており、非常にユニークな建物で在った。その後日本も軍国主義が進みビルに大きなお寺のような屋根を葺くスタイルとして帝冠式が定着する。軍人会館や愛知県庁舎がそれで、建築学的にはあまり評価されていない。神戸には幸いなことにその帝冠式建物はない。

モダニズム建築

戦後はそれまでの様式主義は廃されて、いわゆるモダニズムの建築がもてはやされた。欧米の建築はギリシャ、ローマ、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス等の様式建築が主流をなしていたが、19世紀からそれらの様式による建築に対してモダニズムの運動が起きていた。モダニズムの建物は無駄な装飾を廃して、機能主義、合理主義、国際主義がもてはやされた。それは戦災復興の時期であり、経済的な理由もあり、むしろモダニズムの考え方に飛びついたとも言える。一切の無駄を省くことはまさに、これから復興していこうと言う時期にぴったりであった。本来無駄を徹底的に廃して作ることは何時の時代でも当然であったが、特に産業、工業化社会になると、生産ラインを徹底的に合理化することは必然であり、その考え方と一致したわけである。また合理主義の考え方の反対が経験主義であり、技術革新の最中ではかえって経験豊かなことが技術の進歩のさまたげと成る考えが主流となり、もてはやされた。新しい発想や考え、アイデアは経験主義が改良主義と隣り合わせであることを考えると、邪魔な考え方であろう。しかし人間には合理的なことだけではなく、歴史的な経験も大切であることは言うまでもない。

モダニズムに対する疑問

合理主義的な考え方だけでは人間性に潤いが無くなり索漠とした状態に成る。また国際主義は人間は平等であり、世界中の人間は同じように2つの目と耳、1つの口と鼻を持って生まれた共通性が強調された。しかし、同じ目と鼻と口と耳を持ってても、一卵性双生児を除いて2人として同じ顔の人間がいないことも事実である。この様な違いという個性をもっと大切にしようと言うのがポストモダンの考え方であろう。この時期が第3期と言える。しかしポストモダニズムの建築は余りにもモダニズムの建築の反対を行った為に、例えば様式主義の伝統様式に対して技術的にも未熟であり、ましてそれを支える職人達もいない状態で、歴史の断絶した時代では出来た建物が未熟で軽薄なだけで、多くの国民の支持を得るところまで行かなかったと言える。ポストモダニズムの一派としてデコンストラクチュアと呼ばれ建物が出来たその

時から壊れた建物のようなデザインの建物が設計されたが、阪神大震災があり多くの建物が壊れた時に、そのような建物のデザインは拒否されたと言える。

日本伝統様式の見直し

21世紀に成って、古い民家や建物が見直され、兵庫県では全国に先駆けてヘリテージマネジメントの制度が立ち上げられた。これまで文化庁は文化財に指定された建物の保存修復をしてきたが、特に民間の建物や民家はいくら技術的にも、地域文化的にも優れていても、何の手立ても施さない内に、次々と壊されてきた。多くの国民はふと気付くと戦前に建てられた建築の数が大変少なく成っていることに気付いた。私達が技術の先進国である欧米へ旅行すると多くの戦争があったにもかかわらず、古い町並みが多く残されていることを知った。それは古い町並みはその地方の歴史であり、伝統文化であり、それが集まって、その国の文化が構成され個性が育まれていたことを知っていたからであろう。これまで日本の建築技術者は新しい建物を作ることは得意だが、古い建物を改修し、修復する技術力が欠けていた。職人達を見ても、かつての大工ならば、原寸を書き、それをもとに木づくりを行い、それを建てて、家を作ってきたが、現在では、コンピューターにより、いきなり設計図から機械により柱や梁の木材がブレカットされ、大工はログを組み立てるように、鋸や鉋を使うことなく、ホッチキスのような機械で釘を打つ、鑿や鉋を使えない金槌工に成り下がってしまった。左官もかつては土壁を塗り、漆喰や大津壁等の仕上げを行い、三和土土間を作っていたが、工業化の名目の内に、全て工業製品のサイディングやボード等の乾式壁工法に変わってしまい、現在ではコンクリート床均し工となってしまった。文化財を修復する職人を除いて、まともな職人達を育てる環境が無くなってしまうと、新しく在来工法で家を作ることが困難な時代に成ってしまった。今ならばかつての工法を身につけた職人がいるが、後10年もすれば居無くなるだろう。イタリアでは已に年間の建設投資額は新築工事よりも古い建物を改修する工事金額の方が多く成った。21世紀環境を考える時代と成ると、日本も何時までもスクラップアンドビルドの考え方は許されず、いずれ近い内にイタリアのように保存改修の時代がくると思われる。それに備える意味もあってヘリテージマネジメント制度が設けられたと言える。

以上を総括すると、1945年以前の明治維新から欧米の建築を学んだ近代建築の時代と、日本独自の建築を模索した時代に分けられる。太平洋戦争以後、いわゆる機能主義、合理主義、国際主義のモダニズムの時代とその反省としてのポストモダニズムの時代、そして余りにも工業化が進み、地域性が創出して再び地域らしさを模索して、在来工法が再び見直される、保存修復の時代が21世紀の建築の主流となろう。

第1期以前の建物

19世紀の居留地時代の建物として唯一残されている15番館は神戸の建築を語る原点である。この時代、各国がそれぞれ自国のスタイルで建築を作ったが、この建物はコロニアルスタイルである。居留地では本来一つの敷地の中に事務所部分と住居部分及び倉庫を持った3点セットで建てられていた。神戸の居留地は開港時に未だ造成工事が完成していなかった為に、広い範囲に住居を設けることが許され、北野町山本通にいわゆる異人館と称する建物が多く建てられた。現在国指定の伝統的建築物群保存地域として指定を受けている地域に建つ建物は、トーマス邸、萌黄の館、ハッサム邸、ハンター邸を初め残されている。コロニアルスタイルの建物はアメリカを除いてヨーロッパ諸国には無いスタイルである。列強諸国が植民地として全世界に進出した時に、特に暑い地域で開発されたスタイルと言える。植民地スタイルとでも呼ぶべきものであろう。現在でもそうだが一般的に住宅よりも事業所の方の建物にお金をかける。建物の歴史を語る時にどうしても住宅建築よりも事務所や銀行等の建物を中心となる。

第1期の建築

第1期の時代は東大の前身である造家学科卒業生達の作品がある。現在地下鉄栄町駅の入り口となっている、煉瓦造の外壁が2面しか残されていないが辰野葛西建築設計事務所設計の第1銀行神戸支店(1908)がある。栄町に面したこじんまりとした建物である。折衷的なクラシックデザインのこの建物は戦災を受け外壁のみを残し改装され大林組の神戸支店として使われていた。この建物も解体して建て替える計画が在ったが、当時神戸大学教授の嶋田勝次先生の努力で残されていた。先生は当時神戸市の建築審議会の委員をされていた。神戸の全国に先駆けての都市景観行政を指導されていた。都市景観を考える時に歴史的な建築は重要な役割を果たすからである。都市の発展も大切だが、都市の積み重ねた歴史文化を無視しては全く新しいニュータウンと変わらないからである。アメリカは1776年独立した歴史の浅い国である。歴史の短い分だけ歴史的な建物を大切にする。京都、大阪に比べて神戸は1868年明治元年の開港以来の歴史の浅い都市である。だからこそもっと歴史的な建物を大切にしなければならないのだろう。辰野金吾独特のあくの強いデザインであるが、未だヨーロッパの建築を学んだばかりの稚拙さを感じさせる。若々しさも感じ取ることが出来る。

続いて河合浩蔵の神戸地方裁判所(1904)年が、1、2階の煉瓦造の外壁保存されて湊川神社の東に残されている。この裁判所は壊して建て直す計画があったが、私達神戸の建築家を中心となった「神戸の建築を考える会」が保存運動を展開して部分保存されたものである。裁判所は明治37年に当時巡洋艦1隻分のお金を投入して建設された建物である。大変大きな投資がなされた、国家の発展時期に軍艦を建造するか裁判所を建設するかは国家的な判断があった。日本が列強国と同じ先進国であることを表現する為には議事堂や裁判所等の近代国家を表現するような建物が備わっていなければ1等国とは見なされないとの見栄が働いたと考えられる。太平洋戦争の時の空襲により残念ながら被爆して、外壁のみを残して屋根や床は抜けてしまっ

た。ヨーロッパの建物が第2次世界大戦で空爆にあつて被爆した時に壁のみ残して立っていた姿と同じで、煉瓦壁構造の特徴が良く残されていた。戦後物資の乏しい時代に例えば屋根は安い鉄板葺きであった。その為にその後の改修時には錆が発生していた。また内部中央階段は創建当時の姿から見ると劣るが、きちっと石の手摺りが登っていた。良く改修されたものだと思う。当時の建築技術者達の技術力と努力の跡を感じさせてくれた。現在の裁判所は煉瓦の外壁の裏をコンクリート耐震補強して、ハーフミラーのカーテンウォールの事務棟を載せた姿で建て替えられた。敷地全体は離れとして建てられていた陪審員制度の裁判が出来た法廷建築はそれ自体も建築的に様式近代建築として面白いもので、何故壊してしまったか分からない。ハーフミラーのカーテンウォールは空が写って存在が目立たないつもりで作られているが、実際に建物を見ると良く目立ち、まるで2層の煉瓦外壁は腰巻きのようにまわり付いているように見える。裁判所に行った人ならば分かるが法廷は窓がなく、傍聴人が出入りするドアと判事達が出入りするドアしかない部屋である。窓が不要であるならば、法廷を地下に作っても良いはずであろう。それならば判事室等の事務部分を煉瓦造の建物に設置すればすむことで、もっと建設当時の建物の姿に忠実に再現修復できたはずである。勿論現在のIT技術や空調設備や、エレベータ等の設備を投入すること等大した技術ではない。これからの建物の保存修復する技術やデザインの素養が問われるようになるだろう。

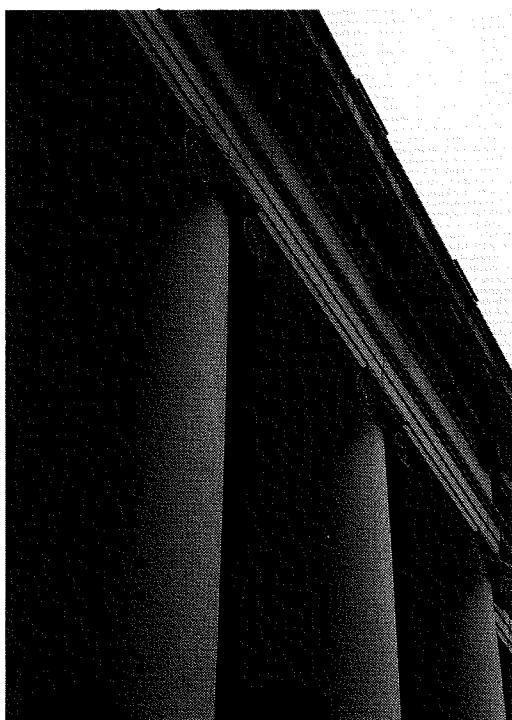
旧兵庫県庁舎が1902年に建設された。この建築は山口半六によって設計されたフランスルネッサン様式といわれる素晴らしいものである。日本人の建築家がヨーロッパの建築を最初学んで真似をして設計されたが、当初は未だ稚拙で技術的にもデザイン的にも未熟性が残されていたが、日本人の器用性か、この建物はヨーロッパの何処に出してもひけをとらないレベルの完成され建築である。当時の建築を支配していたのはバリーに在ったエコデバボザールという芸術家を育てる大学があった。ここに世界中の芸術家が集まった。芸術の王様が建築であると考えられていた。アメリカにおいてもボザール派の建築が主流を占めていた。様式建築の時代はモデルとなる建築が多く在り、しかもしっかりとした建築家に指導を受け、それなりの修行を経なければ一流の建築家にならない時代であった。当時のディプロマすなわち卒業設計は現在と異なり、その応募資格は35歳未満独身男性で何処かの建築家のアトリエに入って実現するような設計図を提出して、それが審査された。一等賞であるローマ賞を受けると1年間ローマ近郊の城が与えられ、そこで1年以上ローマの建築を勉強し、帰国すれば一生、国立の建築を設計することが出来るのである。日本人でそれを獲得した人は居ないが、関東大震災で急きょ帰国し後に横浜工業高校の教授に成った中村順平は当時からその学校でボザールと同じような教育を行ったことで知られている。山口半六はエコデバボザールではないがエコール・サントラル建築学校に留学したが、まさに彼の建築家としての素晴らしい素養を伺うことができる。彼は金澤の四高と熊本の五高の教育施設を文部省技師として設計を行っている。また大阪の都市計画の設計も行っているが、結核の為に41歳で早死にしている。日本を代表する建築家である。

旧兵庫県庁舎も戦災に会い壁のみを残していたが、戦後兵庫県営繕課の建築家達によって修復された。この建物も1980年の初めに日本の高度成長の時代に壊して跡地にオペラハウスを作る計画が在った。オペラハウスはヨーロッパの大きな都市に行くとき必ず在る建物である。中世の教会が中心の時代が終わり、市役所やオペラハウスが都市施設の中心で在った。パリのオペラハウスや、ストックホルムの市庁舎が有名である。また世界コンペとなったシドニーのオペラハウスも現在の建築界では有名である。私はオペラハウスを作ることに賛成であるが、素晴らしい建築を壊して作ることに反対である。日本建築学会の近代建築史研究部会が中心となって、私達「神戸の建築を考える会」が保存運動を展開し、山口半六のお孫さんで、仏教哲学の権威の元東大文学部長の中村元先生も地元であった保存のシンポジウムに駆け付けてくれた。坂井知事の英断によって保存が決定された。この建物は屋根外壁は創建当時の姿に完全に修復された。中庭の一階には大きなホールが作られ兵庫県の迎賓館、県政資料館として利用されている。昨年2003年は建物が建てられて100年記念事業が数多く催された。この敷地のすぐ北側に立っていた神戸栄光教会は阪神大震災によって壊されたが、外観を創建当時の難波停吉設計の元の姿で復元して再建工事中であるが、これと一体になって歴史を感じさせる神戸の都市の核として再現出来るだろう。

このほかに栄町7丁目のファミリア、旧三菱銀行神戸支店（1900）は曾禰達三設計の御影石造りのイギリスルネッサンス様式の本格的な建物である。現在は倉庫として使われ、時々バン

キングホールで演奏会や催しに使われているが、建物全体を倉庫ではなくもっと人々が利用出来る機能に使って建物を生かしてほしいと思う。

栄町3丁目に長野宇平治の設計の元第一勧銀神戸支店（1916）が在った。この建物は無垢の北木島の御影石で出来たイオニアスタイルの列柱が並んだ古典的な神殿を思わせる堂々とした建物である。中央の入口だけ黒御影石で出来ており、まさに神殿そのものであった。ヨーロッパ建築は様式スタイルとして大きくゴシックスタイルとクラシックスタイルに分けられるが、大学や図書館等は知的スタイルとしてゴシックスタイルが好まれた。それはヨーロッパ中世の修道院の建築スタイルであった為に、知識に関係の在る施設に向いていたと考えられる。銀行等はクラシックスタイルが好まれた。神殿にお



第一勧業銀行神戸支店

金を預けることは安全を意味していたからである。クラシックスタイルの変化としてのルネッサンス様式があるが事務所ビルや銀行の建物に使われていた。上記の旧県庁舎や旧三菱銀行がルネッサンス様式であった理由を伺える。残念ながらこの建物は阪神大震災によって列柱が道の反対側まで吹っ飛んで壊れてしまった。私個人的には神戸において一番立派な建築だと思っていた。

フラワーロードの南正面に神戸税関(1932)はアイストップとして又神戸港の要の位置に建っている。北東の角にエントランスホールを持つ円筒状の塔屋をもち、そこに常に税関旗が掲げられている。近年西の方向に増築がなされたが、古い部分のデザインを連続させて設計されており日建設計の技術力の高さが示されている優れた建物である。阪神高速道路の高架構造物がその前を横切っており残念である。早く高架高速道路を地下にでも埋設して、税関の美しい姿が神戸祭りの主会場であるフラワーロードからすっきりと何の障害物もない状態に見えるようにしたい。既成市街地と港の間に大きな高架高速道路が貫通しているが、都市景観上は非常に不味いものである。また神戸のこれからを考える時に既成市街地と港を分断している状態は良くなく、ボストン市は片側10車線ぐらいあった高速道路を全て地下に埋設し、市民が港に近付きやすいように改造した。このことが都市の港湾地域の再活性化に成功した秘訣である。

商船三井ビル(1922)は旧居留地の海岸通に建つ渡辺節によって設計された近代的オフィスビルである。アメリカンスタイルの建築といわれている。それは20世紀初めにニューヨークやシカゴで多く建てられていた超高層ビルのスタイルだからである。このスタイルはクラシックなスタイルの変型と考えられる。神殿は基壇の上に列柱が建ちその上に梁に当たるペディメントが載りさらにその上に屋根の妻が載っている。アメリカンスタイルは基壇に当たる部分をラフなルスチカ積みで作りその部分に何層かの床を設け、ペディメントの部分にペントハウスと称して床を設け、尖った屋根をのせるスタイルである。ニューヨークのエンパイアステートビルがその典型である。ペントハウスに事務所を構えることはステータスでもあった。商船三井ビルはまさにこのスタイルを踏襲している。1階をルスチカで仕上げ伸びた柱の間にオフィスの床を設け、ペディメントにもペントハウスを作り、おまけに建物の正面角に船長の帽子の鍔のような飾りまで作っている。この建



大阪商船三井船務神戸支店

物は鉄筋コンクリート造で工事を短縮する為に普通基礎から順番にコンクリートを打設して行くところを途中の階から上を独立して下と同時にコンクリートを打設して大幅に工期を短縮した。建築技術的にも画期的な建物である。持ち主もこの建物に思い入れが在り、部分的に阪神大震災に被災したにもかかわらず、またタイル張りの腰部分は時間が経過するとよくタイルが剝離して落下するが、その為によくアルミのカーテンウォールを被せて養生している建物を見かけるが、この建物のオーナーはあくまでも建設当初のデザインを守って大切に使い続ける良識を持っており高く賛意を表すべきことであろう。

このほかに旧居留地、海岸通り、栄町通に多くの近代建築が残されている。河合浩蔵設計の2つの海岸ビル、神港ビル、チャータードバンク、旧住友銀行、等である。戦前最後に建てられたのが旧横浜証券銀行の現在神戸市立博物館（1935）である。アテネのパルテノン神殿をまねたドリス式のクラシックなまさに銀行建築の典型の建物である。基壇の上に建つ建物であるから階段を上がって銀行に入るのだが、バリアフリー対策として、実に見事に初めからそうであったようなスロープが設けられ、そこにロダンのカレーの人の彫刻と見事な街灯が建てられている。バンキングホールの高い天井のホールは時々ここで演奏会等が催されている。

特に音響設計は行われていないが、石の床と高い天井のせいか残響が特にクラシック音楽にあって長く、良い音が聴ける。東側の増築部分も新しいが、御影石を使って良く古い部分と調和している。

阪神大震災は神戸の貴重な建築を数多く壊してしまった。特に煉瓦造のロマネスクスタイルの下山手教会や、神戸栄光教会及び中山手教会が被災して壊されてしまった。かろうじて下山手6丁目の神戸教会が塔が被災してしまったがそれを現在の技術で修復した。それを元の通りに直そうとした教会のメンバー及び京都大学の西沢英和氏を初めとする技術者集団には頭が下がる。旧居留地では明海ビル、大興ビル、等が地震で壊された。天災だから仕方が無いが、その中でも元通りに直した建物の持ち主には感謝以外ない。

第2期の建築

この時代の建築を代表するのが旧神戸商工会議所（1929）である。関東大震災によって東京、横浜は壊滅的な被害を被った。この時



旧神戸商工会議所

代すなわち大正から昭和初期は神戸は日本の貿易港として横浜の分も担い、神戸経済は絶頂期を迎えた。大正末の神戸は米騒動や川崎三菱騒動等大正モダニズム文化の絶頂期を迎え、このような激しい騒動が起こったと言える。この時代以後日本は急速にモダニズムから軍国主義に入って行ったと言えるだろう。この絶頂期に神戸商工会議所は松方コレクションで有名な川崎造船所社長の松方幸次郎である。ヨーロッパでは已に第1次世界大戦の復興の為の復興住宅の建設でジードルングとしてモダニズムの考え方で進められていた。日本でも若手が中心となって分離派運動が進められていた。それは過去の様式に捕われることは無く新しい建築を作って行こうとする運動であった。分離とは過去の歴史様式主義からの分離を意味する。しかし未だ大勢は過去の様式主義の建築を引きずっていた。この中からヨーロッパの建築様式の真似では無く日本独自性を如何に表現するかが問われていた。古宇田実 は神戸工業高校後の神戸大学工学部の前身の建築の先生で同時に同校長をしていた。建築意匠、建築史の研究者でもあり、日本の伝統的な寺院建築にも通じていた。旧神戸商工会議所の建物をよく観察すると、一見土色のタイルを外壁に貼った洋風建築に見えるが、正面外壁のスカイラインがお寺の屋根の様にそっている。正面壁の付け柱の頂分には鯨が載っている。その柱に挟まれた窓の腰部分には虹梁の上に蠟燭束の上に肘木杜拱が載ったディテールが施され、北外壁の柱頭には唐獅子が載り東頭窓の下には虹梁の上に蛙股大杜肘木が載り、そのバルコニーの手摺は法隆寺の卍崩しの欄干が付き、それを支える杜拱は加古川の鶴林寺の二つ杜式である。このほかポーチの柱飾りや鬼の面を取り付けた梁の飾り等ステンドグラスの紋様や天井照明機具の周りの意匠等面白いし日本建築を学んだ人ならば堪らなく、また勉強に成るディテールが施されており、一般の人にも西洋では無く、日本の何処かで見た記憶の在る意匠が施されていた。彼の設計した神戸教会もまた西洋の教会に見えるが良く見ると中央の出窓のディテールもエントランスのアーチもまた日本的である。商工会議所の建っていた場所は勝海舟が作った海軍操練所のあった場所である。坂本竜馬もここの塾頭を勤めた歴史的な場所であり、神戸市の土地であった。現在でも新しい建物の前に錨とそれを証する碑が建てられているが、本来ならば神戸市が持ち続け市民に対しての歴史教育に呈すべき場所であるが、一民間企業に売られてしまった。私達「神戸の建築を考える会」が中心と成り、「神戸港を考える会」やCDCと一緒に民間企業の持ち物となったので「旧商工会議所ビルの保存をお願いする会」を作り、1万人を越す署名を集め、単に反対だけでは無く保存しながらどのように将来使い続けるかのコンペを行いその案を市民に対して展示し、持ち主に提供し、またシンポジウムを開きニュースを発刊し考えられるあらゆる手段を投入して保存運動を展開した。残念ながらすぐに建物は解体されてしまった。その後10年以上も更地として放置され続けた。空地のまま放置するならば建物をそのまま残しておけば良かったのと思う。時間が建物が大切なことを知らしてくれと考えていた。現在ではこのような建物を壊すことは犯罪的な非難を受けるだろう。その後日本は軍国主義の暗い時代へと入って行き、先にも述べたようなビルに大きな瓦屋根を載せる所謂帝冠式建築の時代に成って

行った。正当なヨーロッパの様式主義でも無く、また機能主義のモダニズムでも無く、全く建築の歴史の上では谷間のような建築である。古宇田実のこれら建築は日本的な建築の表現として生まれたものであって、何処か神戸的に明るく、むしろモダニズムの一つの日本的な流れの役割を果たしていたと言える。同時に神戸経済が日本経済をリードしていた栄光のモニュメントでもあったと思う。このような建物を壊してそれ以上の建築が作れるというのは錯覚である。よい建築が分からない者に良い建築が作れるわけが無いからである。古宇田実は新開地に在った松竹座も設計している。かつて栄えていた繁華街新開地の中心と成る劇場であった。

北長狭通に在ったモダン寺は明治の廃仏毀釈の時代を経験して、海外からキリスト教をはじめ多くの文物がどっと日本に入ってきた時代に仏教も黙ってそれを甘んじて受けてはいけなと、大谷光端は新しい考え方のお寺を作ってきた。最初に山本通に在る光尊寺であろう。此のお寺は今は建て替えられてしまったが、面白いお寺で、屋根は日本寺院の大きな反って瓦が載っているが、軒から下はギリシャ神殿風のクラシックスタイルで出来ていた。西本願寺神戸別院であった。此の二代目がモダン寺である。鉄筋コンクリートの上に多くの銅製の仏像を模した飾りが載っていた。別院とは末寺では無く本山の出張所である。此の建物も西洋では無く、しかも日本の伝統的な様式でも無い、新しい日本建築の形を模索したものと考えられる。これも保存をお願いに上がったが建て替えられて、屋根だけ元の材料が使用されている。

これまでは私が直接的に関わった建築保存運動を中心に展開してきたが、バブルが弾けて長い不況の時代と成り、行政といえどもお金の無い時代に成ると、またスクラップアンドビルドの使い捨てる時代の反省として、そのうえ地球環境問題が大きく取り上げられる時代にこれまでのような建築観では作れない時代に成ったと言える。安物を使い捨てるのでは無く、良いものを長く使い続ける本来の考え方の時代に帰ったと言えるだろう。

第3期の建築

戦争によって神戸はすっかり焼け野が原になった。早く復興する為には所謂モダニズムの建築がびったりである。無駄な装飾を廃して機能的な建築を早く作ることが求められた。構造的にも合理的で無理をせず、使用上の無駄の無い動線の短い機能的な建物が求められた。アメリカンハイツ（現神戸大学理学部農学部の敷地）に米軍の将校用の住宅が又、有馬道や東遊園地近くに蒲鉾兵舎が作られた。この住宅はアメリカ式のモダンで機能的な建物で、2階のベッドルームにバスルームが併設され、その防水の為に銅板が使用された。兵舎なので無駄の無いアメリカ人の考え方の建物で、リビングルーム中心の新しい生活様式に合った住宅である。それまでの日本人の住宅は座敷が中心で調理室や茶の間は北の寒いところに押し込められていた。それがアメリカ人の住宅を知ると全く異なる明るく接客よりも生活中心主義であり、後の食寝分離の2DK、3DKの現代の日本の住宅の先駆けとなったと考えられる。その後、時代によって多少異なるが、四角い豆腐に目鼻の、建築基準法通りの外観を持つ建物が作られてきた。戦

後すぐは学校建築も木造で作られた。私自身もこの木造校舎で学んだ口である。幸か不幸か朝鮮戦争が勃発して、日本はその後方支援基地として一気に石炭や製鉄産業それに造船業が復興した。戦争によって徹底的に工場等は破壊されたが、戦艦大和を設計した技術者達が残っていたから出来たことであろう。それまで木造であった校舎や共同住宅が鉄筋コンクリートで建設されるようになった。ちょうどその時に現在の王子動物園の場所で神戸博覧会が1950年に開催された。博覧会の建物は会期中だけ建っている所謂仮設建築であるが、神戸の置塩設計が中心となり東京の丹下健三も作っている。私は小学生の時代でもあり建物のことは良く覚えていないが、新しいスタイルの建築であったと記憶している。むしろドーナツが自動的に機械によって人間が居ないのに次々に出来てくる近代的な工場の姿だけが思い出される。

戦後すぐに建った建物として現在の神戸銀行協会をあげる。私は小学校6年生の時に旧居留地にスケッチに行ったことがある。煉瓦造や鉄筋コンクリート造のオフィスビルが立並び、まるで外国に行った様な印象を受けた。その絵は小学校に提出したまま返してもらっていないが、もし残されているならば貴重な資料と成る。ちょうど中町通を大丸から東を望んで描いた記憶があり、東海銀行や大興ビル、当時の神戸銀行が並んでいる状態である。

1960年代に成って神戸市庁舎（現在の第2庁舎）、国際会館、神戸新聞会館が立て続けに三ノ宮界隈に竣工した。市庁舎は日建設計の設計で、当時はやったブラジルのオスカーニーマイヤーのブリーズソレイユは可動式の日除ルーバーが印象的で、建物が南北に長く建てられている為に西日を受ける。その光を防ぐ為と冷房負荷を大幅に下げる省エネルギーの建物である。この意味からは現1号館よりも優れた建物と言える。5階以上は阪神大震災で被災して寸ぶまりの印象を受けるが、手動式のルーバーは今でも健在である。もっとこのようなディテールの建物が出来ても良い。国際会館はニューヨークの国連ビルのシルエットを持つ。即ち高層棟に対して劇場部分を放物線上の屋根を載せ、いかにも現代建築の新しいスタイルを提示していた。新聞会館は村野藤吾設計で、彼独特のデリケートなデザインで紫がかったタイルを貼り、一つの建物の中に新聞社という事務所及び印刷部分、それに大劇場を抱え複雑な機能をすっきりと纏め、塔屋も印象的なデザインの建築であった。商業主義の為か、すぐに北側の大きな壁面に広告としての富士山の絵が描かれ、また塔屋の上に広告塔が載せられた。村野藤吾の気品のあるすっきりとしたデザインは見事に壊され、その上にボーリング場が増築され、竣工した初めに持っていた高貴性は何処かに吹っ飛んでしまった。村野は晩年あれば自分の作品では無いと言っていた。三ノ宮駅前には神戸の玄関であり、顔でもある。そこに建てられた素晴らしい建築を商業主義の為に壊してしまっているのだろうか。大阪が食い倒れの町と言われ、京都が着倒れの町と呼ばれているのに対して、神戸は住倒れの町である。住むに対して倒れるはあまり語呂合わせが良く無いので使わないが、要するに、衣の京都、食の大阪、住の神戸である。建築が素晴らしく南斜面の気候に恵まれた住むのに適した町である。そこに単に目立つから大きなお金が入って来るからと言って建物の価値を失うような生き方が問われていると思う。これに

対して阪神大震災で倒壊した交通センタービルは地震の前は大きなイルミネーションの看板が載っていたが現在は載っていない。何百万円もの収入が入ってくるのだが、それをしないで頑張っている姿には敬意を表する。上記3棟の建物は被災して、市庁舎を除き現在建っていない。国際会館は已に建て替えられた。新聞会館の跡地は未だに空地である。神戸の1等地である場所に何らかの建物が出来るまでは神戸の震災復興は終わったとは言えない。大きな地震であったとは言え日本を代表するような一流の設計者と施工者が建てた建物が倒壊してしまったことに対してどのような反省がなされたのだろうか。表面的な意匠にばかりこだわって基礎的な構造や安全性が軽視された底の浅い考え方が戦後の日本の基底に流れていたのだと思う。同じ所に建っている建物でも倒壊していないものが沢山存在している事実に対してどのように説明できるのだろうか。

次に神戸を代表する建物は神戸市が先導した市街地改造ビルである。狭かったセンター街を拡幅する為に建物を共同化して再開発された。地主、家主、店子の複雑な権利関係を調整して、街区ごとに一つに纏める仕事は大変な作業量と、複雑な人間関係を調整しなければ出来ない。全国に先駆けた此の事業は神戸の都市の骨格を形成した。統一されたデザインと仕上げの外観はややもすれば混乱する町並みを纏める役割をはたした。大阪駅前の再開発事業と比べても、決して劣ることは無い、むしろ神戸の方が統一感があって良い。よほどのエネルギーを使ったのだろうか、神戸市はその後都心の再開発事業から手を引いた。住吉駅前と六甲道北の地域拠点開発に精力を集中して行った。震災後に新長田と六甲の副都心再開発に手腕を発揮した。

神戸において建築に関わる大きな組織として、神戸市と兵庫県の2つがあげられる。兵庫県は県立の全ての施設の設計を営繕部でやる。全国でも珍しい優れた伝統と人材の組織である。県庁舎も当時おられた光安義光氏を中心とする営繕が設計したものである。1期からはじまり同じ色の茶色のタイルが貼られ、窓の下には特殊な腰飾りがつけられている。現在3号館まで建てられているが、1階部分が少し異なるだけである。光安氏が設計したのは1号館だけであるが当時茶色のタイルといえば竹中工務店の岩本博之が作った、所謂竹中色から如何に抜け出るのが課題であった。そこで光安氏は茶色のタイルをスクラッチして、県独特のタイル仕上げとした。またル・コルヴィジェのロンシャンの教会の大きな庇に刺激されて、前川国雄は上野の東京文化会館や京都会館のように反り返った庇が個性的なデザインとして評価されていた。一方浦辺鎮太郎は倉敷を中心に設計活動をしており、前川国雄の反対の庇の先を大きく下げる形態を設計していた。光安氏はこのような時代の中で、プレキャストコンクリートによる折板構造的な独特の形をしたスパンドレルを作った。置塩章を初めとする先輩達の伝統をよく引き継いだ素晴らしい建築である。兵庫県庁舎が設計された時、この敷地は都市計画の用途地域として住居地域に指定されていた。当時商業地域で建物高さは31メートルまで建てられ、住居地域で20メートルまでの高さしか建てられなかった。その地域変更を行い、現在の総合設計制度を

行い現在の高さの庁舎を設計することが出来た。又神戸は六甲山の南斜面に開けた都市である。街から大阪湾を眺望できる良さがあったが、東西に大きな壁のようにたてる事は眺望を著しく疎外される事になり、かなり議論された経緯がある。又県民会館は当時ニューヨークに建ったパンアメリカンビルは超高層の外壁を金属とガラス張りから、プレキャストコンクリートの重い材料を使って建てられていて、世界の話題となったが、それをいち早く取り入れたのが県民会館である。しかしその前に建つ栄光教会の背景としては如何なものであろうか、スケッチをする時も、写真を撮る時も邪魔になる建物である。このように技術的にはトップレベルであるが、都市の景観を考えた場合もっと配慮するべきであったと思う。神戸市庁舎は日建設計であり、姫路市庁舎は安井設計であり、西宮と伊丹市庁舎は山下設計である。大阪市庁舎は日建設計で、東京都庁舎は丹下健三である。此のように観察すると兵庫県営繕が如何に優れた組織であるかが分かる。県庁周辺には旧庁舎の保存修復工事は終戦後の神田氏を初めとする先輩達の素晴らしい仕事を受け継いだ建物である。また北側には教育会館、婦人会館等質の高い建物が建っている。最も最近では貝原知事から安藤忠雄に設計を依頼することが多くなった。ハット神戸に出来た近代美術館は彼の設計である。王子動物園の前にあった旧近代美術館は村野藤吾氏の基本設計を県営繕が設計したものである。一方神戸市は神戸文化ホール等例外的に自前の営繕が設計しているが、市庁舎をはじめ交通センタービル、須磨水族園等の主な建物は日建設計である。皮肉な表現だが神戸市営繕部日建設計課と呼ばれていた。学校や小さな集会所は自前で設計しているが、大きなメモリアルな仕事は大きな組織設計事務所に頼むのがむしろ一般の自治体の設計である。

神戸市内での大きな建物は主に日建設計と竹中工務店の設計施工の建物が多い。日建設計の建物は神戸市庁舎、ポートピアホテル、センタープラザ、サンプラザ、交通センタービル、国際会館、須磨水族園、神戸税関の改修増築工事等目抜き通りの大きな建物を手掛けている。竹中工務店は新神戸オリエンタルホテル、朝日会館、海岸ビル改修増築工事、それに設計部長であった岩本博之が決めた茶色のタイル張りの所謂竹中色のオフィスビルを数多く建てている。小さな建物であるが竹中大工道具館は一企業として神戸市民へのお返しだろう。高い質の職人の技を伝える良い建物である。勿論展示されている道具も素晴らしい。勿論施工を請け負った建物は言うまでも無く多い。

横浜市の建築は有名な建築家が設計したものが多いのに対して、神戸の建築は有名では無いが、確りとした、実質的な設計組織に設計されたものが多い。これもファッション都市、貿易都市と言われているが、現在では撤収して跡地をハット神戸となっているが、神戸製鋼、川鉄の2大製鉄所、川崎造船、三菱重工の2大造船所に海を塞がれた重工業都市だからであろう。此の為神戸商工会議所歴代会頭職は製鉄所、造船所の社長経験者である。かつて神戸の建築を設計した人々は辰野金吾をはじめ河合浩蔵、曽根達三等日本を代表する建築家であった。勿論

明治大正時代は建築家の数が少なかったせいもあるだろう。現在はどうなっているのだろうか。

神戸の住宅

芦屋、御影の阪神間、須磨の高級住宅でもあまり有名な建築家が設計していない。2流の上の実質的な建築家の設計したものが多い。例外的にライト設計の山邑邸、此の建物は重要文化財に指定されている。此の住宅は桜正宗社長別邸であった。芦屋川に張り出した小さな尾根の先端に位置し、芦屋のランドマークの役割を果たしている。これを壊してマンションをたてる計画が持ち上がった。阪神間の建築家が立ち上がり保存運動が展開された。市民を巻き込んだ運動に展開し、東大名誉教授であった藤島亥次郎先生がいらして大正時代初の国指定重要文化財に指定された。渡辺節の設計した取り壊しが噂されている乾邸（御影）、此の建物は乾汽船社長の乾氏の相続税として物納されたものである。現在国の持ち物であるが、財政難の名目の元に文化財を壊して良いものだろうか。ボーリスの室谷邸（須磨）が有名である。どちらも重要建築文化財クラスの住宅である。近くに設楽貞雄設計の西尾邸がある。彼は新開地にあった聚楽館の設計者である。

住宅建築としては相楽園、旧小寺謙吉邸がある。中山手5丁目の大きな屋敷には厩舎（1917）、ハッサム邸（1902）、船屋形が残されている。

1970年に万国博があり、日本中が世界に始まった学園闘争で揺れた。少し落ち着いた1981年全国初の地方博であるポートピア81が埋め立て工事が完了したポートアイランドで開催された。その後全国で地方博が展開されが全ての地方博は赤字である。神戸博だけが100億円近くの黒字であった。商人顔負けの商業者であった都市経営者宮崎辰雄神戸市長の才覚であろう。日本全体がバブル経済に湧いた良い時代に市長だったせいもあるだろうが、山を削り海を埋め立て両方で儲けた。マルク債等の為替でも時を得た。現在の財政破綻した状態からは想像も出来ない豊かな時代であったと言える。神戸博会場の施設は建築歴史に特記するようなものは無かった。また1棟も地元の建築家が関わった施設が無かったことも、地元の建築家が1人も育っていなかったことを示している。戦後の神戸博の場合でも地元の建築家が建てているのにである。行政をはじめ企業が地元建築家に発注せず育ててこなかった事を意味している。地域性を大切に作る時代に成ると、もっと地域の人材を育てる責任があるだろう。それで無ければ住宅都市、建築都市と自負してきたことを受け継ぐことは出来ないだろう。

安藤忠雄の時代

安藤忠夫は建築家として独立した当時、神戸に事務所を開いた。神戸に仕事があったからだろう。現在東大名誉教授で世界を股にかけている今や巨匠である。北野町にローズガーデン、リンズギャラリー、クインズコート等コンクリート打放と煉瓦積みで、必ず2棟の建物を組み

合わせたコートを持ったプランのこじんまりとしているが北野町の異人館街のスケールにあった良い建物である。彼は住吉の長屋で日本建築学会賞を取り一躍有名になった。あくまで化粧ベニヤをきちっと割り付け、緊結ボルトであるホームタイもベニヤに併せ割り付けたスタイルを徹底し、ローコスト住宅の場合床もコンクリート直接均す建具以外コンクリートしかない緊張した空間をつくる安藤スタイルを全国に広めた。片持ち梁を使わず、柱梁構造か壁構造の曲線を使わない切りつめた表現を守り続け、千利休の草庵茶室に通じる切りつめた表現が、反対に空間の質を問われる様に自分を追い込んで作り続けた。彼はもともと器用な人間でよく手が動き、無名時代店舗等を多く手がけてきた。その上手さを消して極限まで手法を切り詰めたことが今日の彼を在らしめているのだと思う。その後六甲の急斜面に建てた集合住宅、そして兵庫県近代美術館と大きな建物を手掛けている。しかし初期の彼の持っていた緊張感や細かい部分にまで気を配った密度の濃い建築からは遠い。あまり大きすぎる建築はどうしても人間のスケールから離れてしまう。世界では工場等を除いて人間が使う大きすぎる建築は分節して出来るだけ人間のスケール感にあう大きさにして作っている。細かすぎる分節は混乱を招くが、ある程度のヒューマンスケールに纏めるべきであろう。

第4期の建築

阪神大震災以後神戸の建築は変わったのか。確かに震災復興の共同住宅や再開発ビルが大量に建設された。復興事業の為か、ふざけた建物は無くなったが、これからを展望するようなものは作られていない。戸建て住宅の再建の場合も、申し合わせたような新建材の住宅が建ち並び、かつての町並みはすっかり変わってしまった。大量生産された材料は全国何処に行っても同じで、地域性、地域らしさが無くなり、住宅展示場のような、20年しかもたない仮設住宅都市に成り下がってしまったように見える。こうした中で、重要文化財の15番館が地震により完全に崩壊したが、此の建物は重要文化財に指定され、文化庁の肝煎りで改修工事が終わったところで全壊した。その改修工事はこれまでの文化財の改修を根本から見直す事件であった。出来るだけ創建当時の建築を保つ為に免震構造を取り入れ、再建された。また旧ユニオン教会（ボーリス設計）をフロインドリーブの喫茶店兼本社としての改修工事。また兵庫県香住の漁業民家を解体して、長田の御蔵地域の集会場として移築改修工事はこれからの21世紀の建築のあり方を示している。御蔵地域集会所の場合痛んでいる箇所を取り替え継ぎ木等の大工工事から始まり、土壁の小舞組から、土に藁すさを混ぜて半年以上寝かし、それを下地と塗る在来工法で再建された。学生を中心に多くのボランティアによって作られた。これまでのように工務店に任せてしまう工事の進め方では無く、住みそれを使う人々が自分に出来ることは出来るだけ自分たちで作ると言う、時間がかかり多少下手でも良いと思う。御蔵地域は阪神大震災で町が焼けてしまい、新建材で出来た全く新しい町に変わった。だからこそ明治に建てられた伝統的工法の民家に郷愁を感じたのだろう。このような工法や考え方の建て方は今後増えて行くだ

ろう。私が関わった西出町の「まちなか倶楽部」の場合も同じような工事の進め方で建てた。普通行政が建ててくれた集会所はなかなか自主的には使われていないが、自分たちで汗を流して作ったものは放っておくわけは無く、使われ続けている。私自身も震災後被災していた関帝廟の補強改築工事と西出町の木造民家の耐震補強及び修復工事、宝地院の耐震補強改修工事に携わることが出来た。このような工事には高い技術力が求められるが、このような工事が今後の日本において増えて行くだろう。短い時間でも時間を経た建物を大切に長く使い続けることは今後ますます求められるように成って行くだろう。

